筑紫女学園大学リポジト

A Study of Painters of Frontispiece Paintings of Sutras made in the Heian Period

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, 知美, OGATA, Tomomi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/256

平安時代の経絵の作者について

緒　方　知　美

A Study of Painters of Frontispiece Paintings of Sutras made in the Heian Period

Tomomi OGATA

はじめに
1　経絵様式の成立過程－経文の書体・経絵の表現の変化－
2　作者について
3　経典制作の環境
むすび－平安時代絵画史における位置付けへむけて－
平安時代の経絵制作関係史料

はじめに

紺紙金字経典見返し絵（以下，経絵と呼ぶ）(注1) については，平安時代を中心に多くの作例をのこす特徴的な絵画として研究が重ねられてきた。先行研究によって，当時の経絵の歴史的展開が明らかにされてきたほか(注2)，主題選択の傾向(注3)，料紙装飾の金銀泥絵との比較(注4)，モチーフにおける世俗画や宋版本の影響(注5)，描線主体の様式(注6)，仏教図像としての面など(注7)，様々な側面がとりあげられてきた。しかし，この特殊なジャンルの絵画を，当時の絵画史全体のなかでどのように位置付けうるかはいまだ定まっていないように思う。福井利吉郎氏の「平安時代絵画史の重要な素材となる」(注8) という言葉の素材という用語には，経絵の絵画史的位置付けの不安定さが示されている。この位置付けのための一歩として本稿では，経絵様式の成立過程を概観したうえで，その作者と制作環境についての史料的考察を試みる。

1　経絵様式の成立過程－経文の書体・経絵の表現の変化－

はじめに，経絵様式成立の過程をたどっておく。経絵全体をみわたすとき，特徴的な性格として，表現の精粗・巧拙の幅がひろい，ということがあげられる。この性格が，経絵の絵画史における位置付けを難しくしている理由であるが，ほかの絵画ジャンルと異なる重要な着目点となる。もうひとつの着目点として，経絵はつねに経典に付属するということがある。経絵は経文とともにある，ということはいうまでもないことであろうが，絵画研究の対象として経絵に接近するときともすれば忘れがちなこのジャンルの存在根拠である。

図版１　延暦寺銀字本（９世紀）本文

図版２　延暦寺銀字本巻第５見返し絵

そこで，経絵様式の絵画表現の巧拙・精粗と，経文の書体の二点に着目して経絵様式の展開を単純化して要約するならば次のようにいえよう。９世紀の延暦寺銀字本の(注９)，細い線による謹厳な書体（図版１）と対応する，画面右端に斜め向き釈迦説法図を配し，奥行きのある空間に大ぶりなモチーフを構築的に配置する経絵（図版２）から，11世紀の延暦寺交書本(注10)の，角の取れた書体（図版３）と対応する，画面中央に正面向き釈迦説法図を配して遠景をさえぎり，近景に広がる土坡の上に説法図を中心に説話モチーフを展開させるという構図（図版４）を経て，12世紀半ばの百済寺本（図版５）のような定型構図成立へ至り，さらにこの定型を踏襲することで形式化する側面もあるものの，新たなモチーフを取り入れたさらなる表現の展開を示すものがみられるようになる。その展開のなかで特筆すべきは，金字経制作に習熟した作者による典型的な書体や画風が認められる一方で，より素人的な書体や絵画が常に並存することである(注11)。一般的に仏教に関する絵画は儀軌に忠実で，制作者の個性的表現はめったに表にでない。書についても奈良時代写経の場合は，経典としての規範であるところの唐経を，内容的にも表現的にも厳密に模倣するという厳格性を特徴としている。このような手本の拘束性や表現の保守性は日本古代に限らず仏教芸術に一般的に見られる性質であるといえる。しかし平安時代の金字経には，経典本文においても見返し絵においても，この性質を逸脱するものが含まれているのである。

図版 3　延暦寺交書本（11世紀）本文

図版 4　延暦寺交書本巻第 5 見返し絵

これまでの研究では，平安時代の経絵について，主流をなす正面構図と特殊な斜め構図に大別し，前者の系譜において定型が成立したのち類型的表現が主流となるという図式で全体を把握することが多かった。しかしあえて定型の系譜の中の類型以外の作品に着目してみると，定型成立後もその踏襲のみで終わらず，新たな展開が兆していることに気がつくのである(注12)。この，仏教絵画としては比較的めずらしい性格をもちえた経絵の制作環境，つまり経絵様式の母体を考えてみたい。

2　作者について

経絵そのもの作者については文献記録が乏しいため，経典全体の制作者にまで対象をひろげ，史料的考察を加えてみる(注13)。

はじめに平安時代以前についてみておく。奈良時代の天平年間を中心として，天皇や皇后などの発願により数次にわたる一切経書写をはじめとする膨大な数に上る経典が制作され，遺品も多い。これらの写経は，官立写経所において，書写をする経師，校正をする校生，装潢，そして金銀字経の場合は瑩生にいたる専門工人が，組織化された分業方式にのっとって制作していたことが正倉院文書研究から明らかにされている(注14)。経文は，選ばれた写経生が，手本を厳密に模倣して書写した。なかでも，紫紙金字経や紺紙銀字経などを専門とする写金字経所においてつくられた作品は，きわめて厳格な書体を示しており，写経生のなかでも優れたものの関与が推測されている。現存す

る金銀字経には見返し絵はついていない。しかし，写経所において経師とともに作業していた画師が経典の表紙・見返しにも描いていた可能性がある。こられの写経所で作られた国家的写経には，料紙や軸に装飾を凝らした装飾経が含まれていたことが知られ，現存作品としても正倉院の梵網経表紙絵や新羅経や唐経の見返し絵があるが，それら山水，独尊像，説法図，説話図などの多様な主題の表紙絵・見返し絵と平安時代の経絵との直接的関係は指摘できない。

一方で写経所の外においても写経活動の広がりがあった。現存作品の奥書や日本霊異記の説話【史料１】などからは，地方領主などが経師を雇い，あるいは僧俗が自ら書写して経典制作をおこなっていたことが知られるが，これらはほとんどが素紙経であったと考えられ，見返し絵についての言及は皆無である。

平安時代には，写経所が解体され，一切経を中心とする国家的な経典書写は影をひそめるが，９・10世紀には法華経信仰の広がりによりその書写がおこなわれるようになる。作者についての記録は，弘仁６年(815）の上野国浄院寺の教興結縁一切経にある「経師近事法恵」【史料２】，仁寿３年(853）の大坂真長発願大般若経の「経生沙弥円勢」【史料３】，天暦７年(953）の星宮神社の大般若経の「経師僧勝　」【史料４】などがあげられる。12世紀に降るが，松尾社一切経奥書には，「執筆僧」「筆師僧」と僧名の上につける場合が多く【史料５】，中尊寺金銀一切経でも「執筆僧」などを僧名に冠している【史料６】。継続された松尾社一切経書写には写経聖のような「執筆流浪修行者」も参加している【史料７】。一方で常陸国の書生が能書100人を請うて写経した例もある【史料８】。これらの記録から，平安時代前期には，在俗の能書も関わっているが，しだいに経典書写の中心的担い手が僧侶に変化してきたことがみてとれる。作者の身分を明記する記録があまりのこっていないのは，経典は仏教修行にとって必須のものであり，その書写も当然ながら僧侶の仕事の一つであったからであろう。

このような経典制作のなかで見返し絵をそなえていた可能性が高いのは金字経であるため，以下，金字経制作についてみてゆく。平安時代10世紀までの金字経は，天皇やその周辺の貴族らにより制作されるものが多く，亡き母や妻の追善供養や，算賀の法会のために作られている。さらに10世紀にはいると地方受領なども手がけるようになったことが知られる(注15)。承和４年(847）に帰朝した円仁が，中国五台山において金字法華経，金銀字一切経を見ているため，彼の帰国と９世紀後半に金字経書写の記録が増え始めることは無関係ではないであろう。

９世紀の最初を飾る金字経の記録は，最澄が中国天台山巡礼に持参した法華経であるが【史料９】，どのような筆者によるものか，また見返し絵がつけられていたかどうかも不明である。嵯峨天皇の宸筆金字経が「一点一画体有り勢有り」とされ楷書の名手鍾繇を引き合いに出して形容されていることからすれば【史料10】，このころの金字経においては，謹厳な楷書体による経文にこそ価値が認められていたと考えられよう。しかし10世紀になると，同じ天皇宸筆経金字経に関して，表紙絵についての言及が見られるようになる。延長３年(925）の醍醐天皇宸筆経では仁教法師が【史料11】，天暦９年(955）の村上天皇宸筆経については飛鳥部常則が関与している【史料12】。前者は「勘申」であり関与の仕方はわからないが，後者は表紙絵に奉仕したことが明らかである。僧侶と絵所絵師

という出自を異にする作者が表紙絵に関与していることは着目される。この醍醐天皇宸筆経の２年後，延長５年(927）には，克明親王が藤原清貫六十賀のために，道風筆・忠則手になる金銀絵色紙法華経を作っており【史料13】，10世紀半ば，金字経をはじめとする装飾経に，祐筆や宮廷絵所の絵師が関与する場合があったことが知られる(注16)。

11世紀以降，天皇や貴族らによる自筆金字経の制作がさらに増えるが，その代表は長徳４年(998)に道長が書写し，のちに金峯山に埋納した金字法華経であろう【史料14】。当時の貴族の日記からは，経典の書写が彼らの日常生活の一部となっていたことがわかる。金字経制作はさらなる流行をみせ，万寿５年(1028）には道長銀泥一切経の記録が見え，のちに白河院らに継承される金字一切経書写の嚆矢となった(注17)。また11世紀後半からは，のちにふれるように，一日経供養が，金字経に関してもしばしば行われるようになる。

このようにして11世紀後半から金字経をはじめとする経典の大量制作の時を迎え，それに応じて「経師」の記録がしだいに増えてくる。平安最初期における栗栖野一切経の「経師僧」「経師」の区別は，経師に僧侶と俗人があったためであろう【史料15】。中期以降になると，忠平【史料16】，道長【史料17】の写経に関わった「経師」については明らかでないが，藤原行成の発願した大般若経では装潢に関与した「重勤法師」【史料18】，一条天皇追善結縁経では料紙を染めた「寿増法師」の名が残り【史料19】，写経の装潢や料紙準備に関わった僧侶の存在が確認できる。源俊房発願一日法華経では，経師30余人で法華経一具の書写・調巻・外題執筆にいたる一連の作業を６時間ほどで完結させており，そのうち外題を書いた長尋の名から，この経師集団は僧侶であったと考えられる【史料20】。同じく経師の関わったことがあきらかな金字一日経が，白河院崩御時や【史料21】，近衛天皇【史料22】・叡子内親王【史料23】の追善のために書写されている。また，比叡山において書写され，日吉社において供養された金泥如法経の例もある【史料24】。さらに，待賢門院金字一切経のための表紙の絵案などを源師時より受け取った「正法房」【史料25】，京都の陣中に住宅を構え，弟子を抱え雑物を備蓄していた「経師法師」【史料26】の例も，僧侶としての経師である。一方，行成が筆を借りた「経師」【史料27】や，行成と道風の書を行成の子孫の定信へ売りつけた「在俗経師」の妻の記録【史料28】からは，祐筆の家と関係をもつ在俗の経師もいたこと，また，天皇宸記【史料29】など経典以外の書写に関わる経師もあったことが知られる。

以上の記録から，奈良時代に官立写経所において大規模な一切経書写を組織的に行っていた写経生から，平安時代には僧侶のなかからでた経典制作に専門的に関わる人々へと経典制作者が変化したことがあとづけられる。彼らは「経師」と呼ばれ，一日経制作に際しては30人余の集団をなして活動し，寺院の住房のみならず陣中に住む者もいた。経師は素紙・金字を問わず経典制作に関わり，材料の筆や料紙や金銀泥の準備や備蓄，書写，装潢などの経典書写にまつわる一連の作業をおこなっており，見返し絵制作もまたその一連の作業の一つとして経師が手がけていたと推定される。先にあげた10世紀の２例以外，経師の記録の増加する11世紀以降の金字経制作の最盛期においてさえ，見返し絵・表紙絵の作者を示す史料がほとんど見出せないことは(注18)，それが写経制作の一部として組み込まれていたためであろう。

12世紀になると，経師のなかから僧綱位に任じられる者が登場する。『初例抄』には，大治４年（1128）に尋意が経師として始めて僧綱に補任されたとあり【史料30】，彼はその６年後まで同じ法橋の位にあったことがわかる【史料31】。ついで忠伊が僧綱位を得，16年後まで同位で活躍していたことが知られ【史料32】【史料33】，長寛２年（1164）には，仏師の11人と絵仏師の５人に対して経師1人と，数は少ないものの，僧綱位経師の存在が確認される【史料34】。寿永３年（1184）に円厳・良厳が法橋位にあったことがわかるが，この円厳は10年前から同位にあった【史料35】。また，建久６年（1195）の東大寺大仏殿供養に際して，華厳経に関わった良厳の譲りで良延が法橋にあげられている【史料36】ことから，経師のうちにも仏師や絵仏師と同じく継承すべき流派をもつ場合があったことが推定される。彼ら僧綱位経師は，その初例となった尋意は白河院の，つづく忠伊は鳥羽院の，円厳は建春門院の周辺で活動し，良厳・良延は東大寺再建に際しての写経に関わるという，いづれも院や女院などの周辺で活動していた経師であった。

そして僧綱位経師の周りには，法橋忠意と競合して経典を制作していた経師勝円や経師永義などの僧綱位をもたない経師や【史料37】，珍順【史料38】，珍賀・栄印【史料39】のように，経師と呼ばれてはいないが経師と同様の活動をしている僧侶がいた。

以上の史料による考察をまとめると次のようにいえよう。平安時代前期，経典制作を主としてになっていたのは僧侶であり，とくに金字経などの場合には天皇や貴族や祐筆が書写することがあった。見返し絵については，10世紀の記録では僧侶と宮廷絵師が関与した例がわずかに知られるが，それ以降は経師の呼称が定着するため，経典書写見返し絵制作も基本的には彼らによるものであったと考えられる。第３章でみた書体と経絵の表現の変化は，このような作者の変遷によって理解することができよう。

すなわち，９世紀の作品の厳格な書体と請来本を忠実に模した経絵の組み合わせは(注19)，当時まだ活動していた奈良時代の写経生に連なる経師と専門画師によるもの，11世紀の書体・経絵に大きな幅をもつ作例については，優作(注20)については祐筆と専門画師によるもの，素朴な作品(注21)については僧侶が書写も見返し絵も手がけたもの，12世紀の半ばの書体・経絵をふくめた金字経の典型的表現の作品(注22)は，僧綱位さえ受けるようになった熟練した経師の手になるものと考えられよう。そしてその典型完成後にも様々な書体や画風が並存していること(注23)は，経典書写には専門家以外の僧侶も必然的に関与するものであり，それに付属する経絵制作も同じ性格をもっていたゆえであろう。

3　経典制作の環境

ここで比較のために，経師とならぶ仏師・絵仏師に関する研究をふりかえっておこう。仏師に関しては，奈良時代の官営工房の工匠が，平安時代初期の官の縮小のなかで寺院工房などに吸収され，手工業技術者としての自立へむかい，盛んな造寺造仏活動の中で社会的な地位を高めてゆく過程を

浅香年木氏らが明らかにしている(注24)。また，発願者の意向を反映しつつ流派の勢力を競いながら造像を行っていた様子も詳細に研究されている(注25)。絵仏師に関しては，仏師ほど明らかではないが，基本的には図像継承などを必要とする寺院の内部から発生し，在俗の絵師とも競合するかたちで，専門的職能をもった僧侶としてやはり系譜をつくって活動したことが平田寛氏により明らかにされてきた(注26)。平安時代の経典制作者については，制作環境のみならず生活形態までもが知られている奈良時代の写経生のように詳細に把握することはできないが，これまでに行った史料による検討によって，あいまいながらもその輪郭が浮かんできたように思う。ここではさらに当時の経典を受容した環境から，彼等の実態に近づきたい。

奈良時代の国家的写経の形態ではなくなったとはいえ，平安時代のとくに院政期には多くの経典制作者が必要とされた(注27)。『中右記』に記された白河院が生前におこなった作善業の列挙は著名であるが【史料40】，金字経書写供養をなした比丘尼法薬【史料41】や僧西念【史料42】など，僧侶の側での作善も盛んであった。これらの作善目録から，12世紀前半において，写経が仏像・仏画・造堂塔とならぶ作善業として認められていたことが知られる。経師が，仏師・絵仏師と同じ造寺造仏の場にあって活動していたことはいうまでもないが，とくに院の周辺においては，物理的な場の共有にとどまらず，より有機的つながりをもって作業していたと考えられる。初めて経師として僧綱位を得た尋意は，僧綱位補任に先立つこと14年前に「院経師」とよばれ【史料43】，「院細工」「院仏師」「院薄師」とともに院の造寺造仏に関わっていたと推測される。院の周辺においてその趣向に添うべく特殊化された工人集団の一群として経師も存在していたことが知られる(注28)。

しかしこのような共通性がある一方で，経典制作は，ほかの作善業と異なる性格をもっている。天皇自身や道長をはじめとする貴族が自筆を行うことに示されるように，経典書写の過程そのものが仏教修行としての意味を強くもっていた。道長【史料44】，師通【史料45】，覚忠【史料46】が，自ら書写した金字法華経を金峯山に埋納し，藤原忠通夫人・宗子が遺令によって棺に納入させていることなどからは【史料47】，完成した作品を永続的に利用し鑑賞することを前提とする仏画・仏像・堂塔などと異なる，経典の特殊な性格がうかがえる。

『梁塵秘抄』の今様に示されるように【史料48】，『法華経』に説かれている，法華経を受持・読・誦・書写・解説するものを菩薩道の実行者としてたたえる「五種法師」の主題は(注29)，経典書写をおこなうもの全てが周知の，書写の理由であり目的あった。経典制作はもっとも身近でかつ尊い仏教信仰の実践であったといえ，制作過程そのものが重要であったのである。経師たちもまたこの経典意識を共有していたはずであり，自らの信仰表明として経典制作に関わりえたと思われる。

このような制作環境において，とくに紺紙金字経は，そして経絵は，当時の人々にとっていったいどのような存在であったのか。

そもそも，金字経に関しては，当時の記録の上で，具体的評価の言葉が極めて少ない。平安時代の造寺造仏に関して，需要者である天皇や院や貴族らが，その制作者である仏師や絵仏師に意向を

伝え，表現を誘導していたことはよく知られている(注30)。しかし金字経については，同じ装飾経典である装飾一品経と比べても，その表現や技術に関する言及が格段に少ない。例えば同じ平清盛が発願した経典の場合でも，装飾一品経である平家納経に対しては，その願文中に「尽善尽美」という言葉がみえ【史料49】，その装飾はまさにその言葉を現実化したものであるといえよう(注31)。一方，平清盛が頼盛と合筆した紺紙金字法華経に対しては，奥書に年月日と執筆者を記すのみである【史料50】。現存する多くの平安時代の紺紙金字法華経には，奥書があることさえまれである。当時の記録にわずかにのこる金字経についての評価語として「其の絵常の如し」があるが【史料51】，積極的なものとしては「殊に美麗」というのが管見の限り唯一である【史料52】。

翻って考えてみると金字経は，最澄が天台山へ献じるために持参し【史料９】，円仁が五台山で眼にし【史料53】，源信が弟子寂昭に託して天台の知礼に送り【史料54】，成尋が神宗より賜り版本一切経とともにもたらすなど【史料55】，天台宗の根本経典である法華経の荘厳としてふさわしい材質・技法としての価値が認められていたことは明らかである。中国を中心として，韓国・日本を初めとする東アジアに広く継承される紺紙金銀字写経は，宗教的な権威をになうものとして広く認識されていたのであろう。

そのような認識が根底にあり，そのうえで平安時代の大量制作がおこなわれたため，金字経は，狭義装飾経のようにその表現に発願者の意向を細やかに反映させる(注32)のではなく，一定の形式さえふまえていればよい対象とみなされていたのであろう。「常の如し」という言葉は，図像を厳密に踏襲するのでない，より緩やかな枠を想起させる。このような金字経制作に，自らに功徳をもたらす作善業の一環として関わっていたのが，経師たちであった。

4　むすびー平安時代絵画史における位置付けへむけてー

これまで，平安時代の紺紙金字経典の制作環境をみてきた。不十分な史料検討ではあろうが，僧侶でありのちに一部が特化して経師と呼ばれるようになる人々によって，発願者の意向をうけながらも自らの作善業として，経典が制作されたことを推測した。経典書写は基本的にその行為が一般に開かれたものであり，金字経の場合においても専門化した経師から天皇・貴族・庶民などが書写に関与し，仏画・仏像の制作よりも主体的作善業としての意味が強かったと考えられるが，そのような性格が経絵の展開に無関係であったとは考えがたい。

とくに金字経に関しては，現存作例を見る限り，図様において前例の踏襲を旨としながらその踏襲は厳密性に欠け，しばしば新たな表現への意識がうかがえることが注目された。たとえば，12世紀半ばの作とされる百済寺本（図版５）と，わずかに遅れるとみなせる妙蓮寺本（図版６）は，きわめて近似した画風を示しているが，画面上方を見ると，百済寺本の鳥の頭の形の霊鷲山が妙蓮寺本では普通の山形となり，画面下方では，岩窟中の仙人に給仕する成人が童子の姿となり，釈迦に宝珠をささげる竜女が水際で侍女をともなう姿から陸の上に上がりこんだ単独像に，というように，

図版５　百済寺本（12世紀）巻第５見返し絵

図版６　妙蓮寺本（12世紀）巻第５見返し絵

両者の図様にわずかな変化が見られるのである。このようなささいな変更が，現存する多くの紺紙金字法華経見返し絵に見出せるのである。このような変化がすべて発願者の特殊な意図を表すものとして図像学的分析にふさわしいとは考えられず，むしろ作者自身の筆先でうまれた表現とみなすべき部分が多いように思われる。

平安時代絵画史研究の中心的テーマとして大和絵の問題がある。記録にのみのこる大和絵は，宮廷絵師による日本の風物を主題とした大画面絵画であった。その「大和絵」の文献上の初見となった屏風の作者が，10世紀に経絵に関与したことが明らかな飛鳥部常則であったことは経絵と大和絵の接点として着目される(注33)。とくに12世紀末以降顕著な発達を示した説話絵巻と線描主体の経絵との画風上の共通点も，着目される(注34)。金字経においては，「常の如し」といわれたように，技法・材質が限定されていた上に主題も経典内容から大きく逸れることはなかったため，それらの面での変化を求めることはできない。しかしむしろそのような限定があるからこそ，描線技術の成熟にもとづき，新たなモチーフ選択や空間構成の展開への試みを示す作品が登場したと考えることができよう。経絵における大陸の手本の消化をとおしての小画面説話画様式の成立過程は，唐絵・大和絵という主題の違いを超えて様式を共有していた当時の大画面説話画の展開を推測する上での参考となろう。経師による経絵は，絵師によるさまざまな世俗画，絵仏師による仏画とともに，平安時代絵画の流れを構成するものとして位置付けられるべきであろう。

（注１）経絵の呼称は広義では仏教説話図を意味し，狭義では平安後期に流行した装飾経見返し絵をさすが，本稿では後者の意味で用いる。

（注２）亀田孜「法華経見返絵と中尊寺経絵」『仏教芸術』72号，1969年10月。(『仏教説話画の研究』1979年２月，東京美術）に収録。須藤弘敏「平安時代の定型見返絵について」『仏教芸術』136号，1981年５月。梶谷亮治「法華経見返絵の展開」（奈良国立博物館編集『法華経－写経と荘厳－』1988年６月，東京美術)。

（注３）宮次男「法華経見返絵と今様の歌」『仏教芸術』132号，1980年９月。

（注４）江上綏「山水経絵のある藤原経の一遺例」『美術研究』295号，1974年９月。

（注５）石田茂作「国宝　紺紙金泥一切経（解説)」『中尊寺大鏡　第３』1931年11月，大塚巧芸社。須藤弘敏注２前掲論文。江上綏「浅草寺所蔵国宝法華経の見返し絵」『国華』1282号，2002年。
石澤法子「本興寺所蔵十巻本紺紙金字法華経見返絵について」『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』10号，2004年３月。

（注６）濱田隆「金光明最勝王経金字宝塔曼陀羅図」『中尊寺』1971年，河出書房。須藤氏注１前掲論文。小林達朗「東大寺本善財童子絵巻の形成」『美術史』127号，1990年２月。

（注７）中尊寺金字一切経にふくまれる六道絵や仏伝図，金銀交書一切経にふくまれる五大力菩薩などが，仏画の図像的研究においてしばしば言及される。泉武夫「五大力画像をめぐる基礎的考察－試論－」『国華』1310号，2004年ほか。

（注８）福井利吉郎「中尊寺経絵略解」『中尊寺経絵』1938年10月，大和絵同好会。

（注９）須藤弘敏「転写と伝承－延暦寺銀字本・仁和寺本系紺紙法華経について－」『国華』1319号，2005年９月。

（注10）須藤弘敏注２前掲論文。

（注11）中尊寺金字一切経（12世紀後半)，中尊寺金銀交書一切経（天治３年〈1126〉供養）において顕著に認められる。後者の幅のある画風については，泉武夫「華厳経見返絵・表紙絵の筆者分類の試み『金剛峯寺中尊寺経を中心とした中尊寺経に関する総合的研究（昭和63年度・平成元年度科学研究費補助金【総合研究Ａ】研究成果報告書)』1990年。

（注12）拙稿「佐賀高伝寺の紺紙金字法華経見返絵」『仏教芸術』224号，1996年１月。

（注13）162頁以下にあげる平安時代の経典制作関係史料は，次の刊行物より収集した。未だ不完全な内容であるが平安時代の経典制作者について全体像を把握するための基礎作業の結果として提示する。竹内理三編『平安遺文　題跋編』1968年，東京堂出版。田中槐堂『日本古写経現存目録』1973年７月，思文閣。関秀夫『経塚遺文』1985年，東京堂出版。中尾堯栄『京都妙蓮寺蔵「松尾社一切経」調査報告書』1997年，大塚巧芸社。国史大系，古典文学大系，史料大成，大日本古記録，大日本仏教全書，列聖全集。

（注14）石田茂作『写経より見たる奈良朝仏教史の研究』1930年３月，東洋文庫。栄原永遠男『奈良時代写経史研究』2003年５月，塙書房。山下有美『正倉院文書と写経所の研究』1999年，吉川弘文館。

（注15）須藤弘敏注２前掲論文。

（注16）宮廷絵師が経典の表紙絵や料紙装飾の金銀泥下絵に関与していたことは，現存作例からも推測される。しかしとくに紺紙金字経見返し絵については，一部分をのぞき，別系統の作者によると考えるべきであろう。四辻季紀「料紙装飾－日本人が培ってきた美意識の系譜－」徳川美術館編集・発行『彩られた紙　料紙装飾』，2001年。

（注17）小松茂美「金字一切経と金銀泥一切経」『平家納経の研究』1976年，便利堂。上川通夫「一切経と中世の仏教」『年報中世史研究』24号，1999年。

（注18）史料25にあげた正法房に関するものが管見の限り唯一である。

（注19）延暦寺銀字本（９世紀）が例としてあげられる。

（注20）神光院本般若心経（11世紀）が例としてあげられる。江上綏「神光院蔵紫紙銀字心経荘厳画の山水表現」『美術研究』301号，1975年９月。

（注21）延暦寺金銀交書本（11世紀）が例としてあげられる。江上綏「延暦寺蔵金銀交書法華経の荘厳画」『美術研究』309号，1979年２月。
（注22）長福寺本金光明経（久安４年〈1145〉），百済寺本（12世紀半ば）があげられる。須藤弘敏注２前掲論文。
（注23）注11参照。
（注24）浅香年木『日本古代手工業史の研究』1971年，法政大学出版局。
（注25）田中嗣人『日本古代仏師の研究』1983年，吉川弘文館。森由紀恵「平安末期における造仏と仏師」『寧楽史苑』41号，1996年２月。
（注26）平田寛『絵仏師の時代』1994年，中央公論美術出版社。
（注27）堀池春峰「平安時代の一切経書写と法隆寺一切経」『南都仏教』26号，1971年６月。
（注28）浅香氏注24前掲論文193頁。
（注29）五種法師の内容〔『法華経』法師品巻第10〕
「仏告薬王，又如来滅度後，（中略）若復有人，受持，読，誦，書写，解説，妙法華経，乃至一偈，於此経巻，敬視如仏，種種供養，華香，瓔珞，抹香，塗香，焼香，　蓋，幢幡，衣服，伎楽，乃至合掌恭敬，薬王，当知是諸人等，已曾供養，十万億仏，於諸仏所，成就大願，愍衆生故，生此人間，（後略）」
（注30）森氏注25前掲論文。
（注31）須藤弘敏「写経と荘厳－平安時代装飾経の特質－」『仏教芸術』153号，1984年３月。
（注32）白畑よし「久能寺経」『三十六人家集と久能寺経』1953年９月，京都国立博物館。亀田孜「平家納経雑俎」『美術研究』114号，1931年６月。梶谷亮治「－研究ノート－平家納経雑感」『鹿園雑集』第２・３合併号，2001年３月。
（注33）大和絵初見〔『権記』長保元年〈999〉10月30日〕
「（前略）書倭絵四尺屏風色紙形，〈故常則絵，歌者当時左丞相以下読之〉」
（注34）小林氏注６前掲論文。

〔附記〕本稿は，2002年～４年度文部科学省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究にもとづき，2004年12月18日に開催された京都美学美術史学会においておこなった口頭発表にもとづいている。
本稿をなすにあたって，作品調査に関し，比叡山延暦寺管理部上村豊喜氏，同寺国宝殿学芸員三井田妙久氏，大阪市立美術館主任学芸員石川知彦氏，同弓野隆之氏，滋賀県立琵琶湖文化館，妙蓮寺の方々に御高配を賜りました。また，京都大学大学院文学研究科の根立研介先生に御助力，御助言を頂きました。ここに記し，感謝の意をささげます。

平安時代の経絵制作関係史料

《経典制作者の呼称》

１）宝亀２年(771) ６月　河内国丹治比郡の人，法華経書写を発願し，丹治比経師を請じて野中堂にて書写させる。〔『日本霊異記』〕
「法花経を写し奉る経師邪淫の為に現に悪しき死の報いを得る縁第十八
丹治比経師は，河内国丹治比郡の人なり。姓は丹治比なり。故を以ちて字とす。其の郡の部内に一の道場有り。号けて野中堂と曰ふ。願を発せる人有り。宝亀二年辛亥の夏六月に，其の経師を請へて，其の堂に法花経を写し奉る。女衆参り集りて浄き水を以ちて経の御墨の水に加ふ。(後略)」

２）弘仁６年(815)　教興，嵯峨天皇以下の安寧と自身の先祖の菩提を願い，上野国緑野郡浄院寺にて一切経を書写させる。経師近事法慧，参与する。〔京都・高山寺蔵金剛頂一切如来真摂大乗現証大教王経３奥書〕
「　　上野国　縁〔緑〕野郡　浄院寺
一切経本
　　掌経仏子教興
　　掌経仏子
　　写経主仏子教興
　　経師近事法慧
　弘仁六年〈歳次乙未〉六月十八日（後略)」

３）仁寿３年(853)　大坂真長の一族，母の菩提を弔うために大般若経を書写させる。経生沙弥円勢，参与する。〔京都・安楽寿院蔵大般若経巻第412奥書〕
「仁寿三年〈歳次癸酉〉二月十五日　為母刀自御仕奉願主
　　外少初位上大坂真長
　　外少初位上大坂好美麿
　　大坂綱好
　　大坂芳
　　戒師仏子義蔵
　　経生沙弥円勢」

４）天暦７年(953) ７月13日　錦村主実貫発願の大般若経書写に，経師僧勝愷，参与する。〔岐阜・星宮神社蔵大般若経巻第113奥書〕
「天暦七年〈歳次癸丑〉七月十三日庚寅願主錦村主実貫
　　経師僧勝愷」

５）永久３年(1115) ２月30日　松尾社神主秦親任・頼親親子，一切経書写を発願。保延４年(1138) ８月６日にかけて多くの僧や俗人が書写する。執筆僧良任・同珍秀（執筆僧珍秀）ら参与する。〔京都・妙蓮寺蔵松尾社一切経奥書〕

「執筆僧○○」「筆師僧○○」

6）永久5年(1117) 2月15日より元永2年(1119) 7月22日にかけて，中尊寺金銀交書一切経の書写・校了者名に執筆僧湛有含まれる。
〔大方光仏華厳経巻巻第2奥書〕「校了／永久五年〈丁酉〉二月十五日〈癸酉〉如之至于同月廿二日二巻書之／執筆　永昭」
〔同巻第10奥書〕「始自永久五年〈丁酉〉二月十五日〈癸酉〉至同年四月十五日一帙奉書写了　執筆金剛弟子僧永昭／大檀那　散位　藤原清衡　女施主平氏」
〔大方光仏華厳経巻第1奥書〕「永久五年四月八日奉書写／執筆僧湛有」
〔同巻第10奥書〕「永久五年四月八日奉写／執筆僧湛有」
〔大品般若経巻巻第22奥書〕「天永二年〈己亥〉二月四日書之　執筆修行僧尭暹　大檀主　藤原清衡(ママ)北方平氏〈六男三女所生〉」
〔同巻第30奥書〕「天永二年〈己亥〉五月廿五日〈庚午〉午時許奥州江刺郡益澤院内書写畢　執筆修行僧尭暹　大檀主　藤原清衡(ママ)　北方平氏」
〔光讃般若波羅蜜経巻第8奥書〕「校本曰／第八本／長治二年六月廿五日校了／以鴨宮本書了　件本以唐本校之了／天永二年五月十一日校了　僧政算」

7）永万1年(1165) 9月15日　平治1年(1159) からこの年にかけて，僧良慶の発願により，松尾谷妙法寺にて，経典を書写する。流浪修行者三井末良厳ら，参与。〔大般涅槃経後分巻下（松尾社一切経のうち）奥書〕
「　永万元年九月十五日辰時書写畢，
松尾南谷
　願主僧良慶
　執筆流浪修行者三井良厳」

8）仁和4年(888)　常陸国書生飛鳥貞成，100人の能書を請い金光明寺にて法華経1000部書写。〔『扶桑略記』〕
「叡山南谷沙門薬恒所撰本朝法華験記云，仁和四年，常陸国書生飛鳥貞成，其宅巨富，財貨豊贍，素篤信，崇敬仏法，一般請列百人能書，於金光明寺，写百部法華経，暨于十度，書千部了，毎日衣冠，礼経三遍，設四日法会，演八座之講経，於国分寺開講供養，（後略）」

《平安時代の金字経制作》

9）唐・貞元20年(804) 9月12日　最澄，天台山巡礼を許可される。東宮封の金字法華経8巻開結を持ち往く。〔滋賀・延暦寺蔵伝教大師入唐牒〕
「明州牒『廿六日許』
日本国求法僧最澄往天台山巡礼将金字妙法蓮花経等
　金字妙法蓮花経一部〈八巻，外標金字〉，無量義経一巻，
　観普賢経一巻〈已上十巻共一函盛，封全，称是日本国春宮永封，未到不許開折〉，（中略）
　　貞元廿年九月十二日史孫階牒
　　司戸参軍孫宝（「明州之印」2顆）」

10）天長３年(826)３月10日　桓武天皇のため，７日間を限り，西寺にて嵯峨天皇宸筆の紫紙金字法華経を講ず。〔『日本紀略』〕
「丁丑。奉為柏原天皇（桓武）。於西寺限七个日。説法華経。（中略）其経太上天皇手跡也。紫雲〔紙カ〕金字。玉軸繡帙。一点一画。有体有勢。珠連星列。爛然満目。観人称曰。真〔書ヵ〕聖。鍾繇逸少猶未足〔脱字ヵ〕云々。又仏堂荘厳。種々法物。尽奇窮異。」

11）延長３年(925)８月23日　醍醐天皇，母后胤子のために，勧修寺にて，宸筆紺綾金字法華経・開結・阿弥陀経・般若心経と刺繍胎蔵界内院曼荼羅を供養。標紙絵を仁教法師が勘申する。〔『勧修寺文書』〕
「延長三年八月廿三日，上供養御手書法華経及繍曼荼羅於勧修寺〈其経法華経，無量義経，観普賢経，心経，阿弥陀経，皆紺綾，以紺紙著表，紺雀綾標紙，金字，金界，水精軸，組帯，標紙絵仁教法師勘申〉（後略）」

12）天暦９年(955)１月４日　村上天皇，醍醐天皇に倣い，母隠子の周忌にあたり，宮中弘徽殿において，自筆法華経・開結・阿弥陀経・心経を用いて八講を修す。宮廷絵所の飛鳥部常則，表紙絵に奉仕。〔『村上天皇御記』〕
「天暦八年十二月十九日（中略）此日，自書写金字妙法華経一部，無量義経，観普賢経，阿弥陀経，般若心経，各一巻已畢，勤仕其事者賜禄有差（中略），御書所執事阿部実茂，縫殿大屬坂本高実，内匠少屬丈部滋茂，越前目代阿部忠茂，右衛門少志飛鳥部常則等，各絹二疋，此調泥装潢及奉仕表紙絵之者也，依延長例所賜也，以明年正月可修御八講也」
〔『扶桑略記』〕
「天暦九年乙卯正月四日。皇帝奉為母儀故太皇太后（胤子）。供養御筆法華経。」

13）延長５年(927)２月25日　克明親王，藤原清貫の六十賀法会のために，小野道風・忠則に法華経・薬師経・金剛寿命経を写させる。写経色紙に金銀絵を描く。〔『扶桑略記』〕。
「廿五日，弾正尹親王（克明）為民部卿（清貫）六十賀，於桃園宮設法会，奉造薬師仏像，奉写法華経，随願薬師金剛寿命般若心経，雑色紙金銀絵之，小野道風，同忠則写之。」

14）寛弘４年(1007)８月11日　藤原道長，金峰山に登り，長徳４年(998）に自ら書写した紺紙金字法華経と，今度書写した開結・阿弥陀経・弥勒上下生成仏経3巻・心経あわせて15巻を埋経。〔奈良・金峰神社蔵経筒陰刻銘〕
「南瞻部洲大日本国左大臣正二位藤原朝臣道長百日潔斎，率信心道俗若干人，以寛弘四年秋八月，上金峯山，以手自奉書写妙法蓮華経一部八巻，无量義経観普賢経各一巻，阿弥陀経一巻，弥勒上生下生成仏経各一巻，般若心経一巻，合十五巻，納之銅篋，埋于金峯，其上立金銅灯楼奉常灯，始自今日期能龍華晨，於是弟子焚香合掌白蔵王而言，法華経者是為奉報釈尊恩，為値遇弥勒親近蔵王，為弟子无上菩提，（中略）弟子道長敬白，
　　寛弘四年〈丁未〉八月十一日」

《平安時代の経師の記録》

15）延暦７年(788）から延暦17年(798）にかけて，栗栖野一切経書写に経師僧・経師ら参与。

〔大乘荘厳経論巻第一（法貴寺蔵）奥書〕
「延暦七年五月二十日　本願主栗野寺
　　檀越　沙弥延命　後奉仕僧定来
　　伊福部連福人　僧勒群
　　経師僧信徹」
〔念仏三昧経巻第三（大養寺蔵）奥書〕
「延暦十七年四月十三日　本願主栗野寺
　　檀越　沙弥尼延命　伊福部連福人
　　後継奉仕僧定来　僧勒群
　　経師　長谷部連益継」

16）延長３年４月(925)４月16日　藤原忠平，亡室頎子の二七日に写経を始める。５月28日経師・細工らに禄を賜う。〔『貞信公記』〕
「十六日戊寅，二七日御誦経，修菩提寺，写経始，（中略）
（五月）廿八日，経師・細工等賜禄，」

17）寛弘２年(1005)６月18日　藤原道長，経料紙を経師に賜い備えさせる。〔『御堂関白記』〕
「（前略）参内候御物忌籠，経料紙賜経師令備，」

18）寛弘５年(1008)３月21日　藤原行成，夭亡の女児追善料として，大般若経を自ら書写。料紙は重勤法師が装潢をひきうける。〔『権記』〕
「壬午，巳時始書大般若，是為幼女児，自去年十二月立願，至今日始手自奉書，経料紙重勤法師装演〔潢ヵ〕，（後略）」

19）寛弘８年(1011)８月11日　藤原行成，一条天皇追善料として，縹紙墨字の法華経と例具経計12巻を僧俗と結縁書写。料紙は納殿の紙を寿増法師に染めさせる。〔『権記』〕
「壬子　今朝令持御経参院，件御経下官所課縹紙墨字妙法蓮華経一部八巻，無量義経，観普賢経，阿弥陀経，般若心経，各一巻，〈色紙者用納殿紙，給寿増法師令染，装潢料物給米五石，（後略）」

20）承保４年(1077)８月28日　源俊房，経師30人を請じ，一日法華経を書写させる。経師のうち調巻の経師と，外題執筆の長尋を特記する。〔『水左記』〕
「（前略）今日，令奉書一日法華経〈色紙銀泥堺〉，辰剋許経師等参入，〈卅人〉，是依昨日催也，各分充枚数令書之，有饗，未剋許各書了給禄，各疋絹，調巻経師賜禄，各疋絹，以長尋令書外題，有禄疋絹，式部丞明業為行事，」

21ア）大治４年(1129)７月７日　白川院崩御に際し，経師，写経に参与。〔『永昌記』〕
「癸未，法皇（白川院）御心地令落之由風聞，但御祈千万，経師仏師挙首，丈六等身御仏奉備前庭，釿音及隣里，（後略）」

21イ）大治４年(1129)７月７日　待賢門院，白河法皇病のため，仏師に丈六仏５体を，工国末に五重塔を，経師深意に明後日供養の大般若経を書写させ，また経師30余人に即日金泥法華経を書写をさせる。〔『長秋

記』〕
「自女院有御消息，御煩（白河法皇）極大事也。（中略）召仏師等，於南庭被造丈六御仏五体，仁和寺両法親王共下庭中加持，又被造五重御塔，工国末承（中略），召経師深意賜大般若経料紙，仰云，自今日書始，明後日可有供養也，且以他料紙可進替他紙也者，又自只今，於此院可令書写金泥法花経，早儲紙并金等，可令書写，於替可下給，但於当時不可叶，如前可取替他用紙也，共承，乃於中門廊，経師卅余人参会，書写之，以莚為座，（中略，白河法皇崩御），上皇（鳥羽）仰云，御仏木等可運送仏師許，崩御已一定也，於今不可有見世御祈歟，蒙此仰，積力車，運出仏木等畢，又，経師等退出。」

22）久寿２年(1155)８月15日　藤原忠通，近衛天皇の菩提を祈り，知足院にて仏経供養。経師能舜，30余人の書手を率い，浄衣を賜り紺紙金字一日経を書く。〔『兵範記』〕
「（前略）今日殿下於知足院被修御仏事，（中略）安金泥法華経一部第一巻，安導師前机，〈件御経，経師能舜率卅余人書手，賜浄衣，自今朝於殯殿礼堂，終紺紙金字一日功也，聖霊御菩提奉為順時生也〉（後略）」

23）久安５年(1149)12月８日　藤原忠実，故叡子内親王の法事を行う。一日のうちに金字法華経1部書写供養。〔『本朝世紀』〕
「（前略）今日。故叡子内親王御正日也。於高陽院土御門東洞院御所小御堂有此事。入道相国令営給云々。一日之中。書写金字法華経一部。即御(以ヵ)供養。（後略）」

24）寿永１年(1182)４月15日　比叡山三塔法華堂にて金泥如法一日経を書写し，後白河院臨幸のもと日吉社にて供養。〔『百錬抄』〕
「於天台三塔法華堂，書写金泥如法一日経，今日於日吉社供養，上皇臨幸，有舞楽，希代之大善也，上下拭随喜之涙，（後略）」

25）保延元年(1135)７月10日　仁和寺宮正法房，源師時へ待賢門院一切経表紙の絵案について尋ねる。８月11日，源師時，正法房を召して御経本２帙・表紙10枚・大般若１帙を給い，銀黄泥各１両・自らの料２分を給う。一切経は保延２年(1136)10月15日法金剛院内三重塔供養に用いる。経師忠伊，書写の功により法橋に補任。〔『長秋記』〕　※〔史料32〕参照
「（前略）自仁和寺宮正法房東（如）女院一切経表紙可謹仕，推絵案可申，盛常来（申ヵ）」「（前略）召正法房，給御経本二帙，表紙十枚，大般若経一帙，給銀黄泥各一両，下官料二分云々」

26）安元３年(1177)４月30日　陣中に火事あり。経師法師の宅に強盗はいる。経師，弟子をかかえ雑物を備蓄する。〔『吉記』〕
「（前略）夜半許在二条高倉辺牛童走来云，陣中有火事云々，（中略）件根元二条北油小路西北陣北門頂知対也，有経師法師宅，而中宮庁一日焼失之後，以件宅仮用庁，而間強盗数輩乱入，庁守男依喚叫無左右切臥，被疵数所，子男負逃出，又経師弟子法師被疵，強盗即放火，件宅一宇并東西宅各一宇焼失畢，東元自為空地，西一日焼了，側不移他所，家主経師一日之此自田舎上洛，又逢焼亡者，宿納雑物若依此事歟，（下略）」

27）寛仁２年(1018)８月21日　藤原行成，経師筆にて白氏詩巻を書写。〔東京国立博物館蔵藤原行成筆白氏詩巻第九紙奥書〕
「寛仁（「長和」ミセケチ）二年八月廿一日書

之，以経師筆，
点画失所，来者
不可咲，〃〃〃」

28）保延６年(1140)10月22日　藤原定信，在俗経師の妻より，小野道風筆屏風土代と藤原行成筆の白氏詩巻を買う。〔東京国立博物館蔵藤原行成筆白氏詩巻巻末別紙墨書〕
「保延六年〈庚申〉十月廿二日〈癸巳辰剋〉，物売
女自蓬門入来，売手本二巻
〈一巻野道風屏風土代，一巻此本〉見一定之由，賜価
直，（傍線二本）女人太成悦気，即以退出，
宮内権大輔定信本也，
件女人宅，自塩小路北，自町尻西，町尻西之辻内，
有在俗経師云々，件経師之妻也」

29）治承１年(1177)11月18日　藤原兼実，時忠と談話。鳥羽院が勝光明院宝蔵に納めた後二代記を，二条院の命により経師が書写したことを談ず。〔『玉葉』〕
「（前略）与時忠卿交語，此次語云，後二代御記〈後朱，後三〉，鳥羽院有御起請，被納置勝光明院宝蔵，（中略）二条院御時，申出被書写之者，〈経師等書之，範兼奉行，其間，経宗，維方，範兼等，少々書取之，依其冥罰，或終命，或懸秩〔禄〕，尤可恐事也〉（後略）」

《僧綱経師の記録》

30）大治３年(1128)10月23日　経師楞珍の子尋意，経師僧綱補任の初例となる。八幡一切経書写の賞。〔『初例抄』〕
「（前略）木仏師僧綱例（中略）
経師任僧綱例，
　法橋尋意，大治三十月廿二叙，八幡一切経書写賞，経師僧綱初例也，経師楞珍子，長承三閏十二月十七日死去，〈六十一〉」

31）天承元年(1131)　経師尋意，法橋に補任される。天承２年(1132)・長承２年(1133)・３年(1134)も同位。〔『僧綱補任』第６裏書〕
「　天承元年（中略）
仏師
　法印円勢　　法眼長円
　　賢円　　長順
　法橋康助　　院覚〈二月廿八日転法眼，法成寺御塔御仏賞〉
　　尋意〈経師〉　　明源〈絵〉」

32）保延２年(1136)10月15日　経師忠意，法橋に補任される。法金剛院御塔供養の際の金泥一切経書写の賞。〔『僧綱補任』第６裏書〕
「　保延二年（中略）

仏師
　法印長円〈清水寺別当〉
　法眼賢円　　院覚
　法橋康助　　明源〈絵〉
　　忠伊〈十月十五日叙，法金剛院御塔供養賞，金泥一切経書写〉」

33ア）保延３年(1137)　経師忠伊，前年と同位の法橋にあり。書経師とよばれる。保延６(1139) から同７年(1141) まで同位・同表記。〔『僧綱補任』第６裏書〕
「　保延三年（中略）
仏師
　法印長円〈清水寺別当〉法眼賢円
　　院覚　　法橋康助
　　明源〈絵〉
　　忠伊〈書経師〉」

33イ）仁平２年(1152) ３月６日　鳥羽法皇五十賀の法会に，法橋忠意作の黄紙墨字大般若経ほかを供養する。〔『兵範記』〕
「(前略）其仏殿（鳥羽殿）中央奉居等身皆金色釈迦如来像一体，（中略）尊像荘厳，仏殿華麗，併難録筆端，法印賢円，奉造御仏，（中略）僧綱凡僧座前，立経机五十八前，並安黄色紙墨字大般若経六十帙，〈櫨色羅表紙，有金泥外題，紫檀地螺鈿軸，有錦縁帙簀付，唐綾裏，法橋忠意勤仕之〉，（後略)」

33ウ）仁平２年(1152) ４月９日　高陽院において鳥羽法皇五十賀の仏経を造り始める。法師忠意法橋，紺紙金泥法華経・寿命経の端三行を書く。〔『兵範記』〕
「(前略）今日於高陽院，被奉始法皇御賀御仏経等，（中略）次始御経，経机安法華第一巻寿命経等也，各紺紙巻，副本経等，金泥入盤，同副居之。件経机，居僧都前，法師忠意法橋参上，〈着浄衣〉，先始法華，〈端三行書也〉，次寿命経同前，」

34）長寛２年(1164)ヵ　この年，経師法橋一人。〔『僧綱補任抄出』下〕
「同（長寛カ）二年，〈甲ヵ申〉，（中略）
八幡法印勝清〈前大僧都〉，以下合七人也，熊野十三人，其中法印二人，仏師法眼七人，法橋四人，絵仏師法印一人，法橋四人，経師法橋一人，」

35ア）寿永３年(1184)　経師円厳・良厳，法橋に叙せられる。元暦２年(1185) も同位。〔『僧綱補任』残闕本〕
「寿永三年〈甲辰〉
　（中略）
　法橋
　（中略）
経師
円厳〈和泉〉　　良厳〈但馬　円厳〉」

35イ）承安４年(1174)８月23日　建春門院御逆修のための御仏経を作り始める。経師は法橋円厳。〔『吉記』〕
「（前略）女院御逆修御仏経令奉始之，仏師為遠法師，経師法橋円厳，且可下行料物之由，可仰御倉〈仲遠〉，之旨，下知宗家先了」

36）建久６年(1195)３月22日　東大寺大仏殿供養。経師法橋良厳・良延調進の東大寺蔵紺紙金字華厳経を用いる。良延，良厳の譲りにより法橋に補任される。〔『東大寺続要録』供養篇〕
「勧賞
（中略）
法眼運慶〈法眼広慶賞譲〉法橋良延〈経師良厳華厳経賞譲〉
院永〈法印院尊賞譲〉
大和尚南無阿弥陀仏（中略）
陳和卿　道々工　　已上追可申請
　建久六年三月廿二日」

37）久安５年(1149)10月25日　藤原忠実，亡妻のため忠意法橋に五部大乗経を造始させる。また待賢門院，故姫宮料として経師勝円に金泥法華経1部を，故北政所料として経師永義に金泥法華経１部を造始させる。〔『兵範記』〕
「成楽院中御堂供養也，（中略）今夕亦奉為彼出儀，被奉始御仏経等
　丈六阿弥陀仏一体仏師院尊　七宝御塔
　　已上於西護摩堂北庇被始之，勝運阿闍梨加持御衣木・〔絹ヵ〕等，
　五部大乗経　忠意法橋
　　本房遣料紙少々料物等了，
今日故姫宮并北政所周闕御法事正日等料，於女院被奉始御仏経，
姫宮御法事料来月十一日，
　両界曼荼羅各一鋪，〈智順法眼，御衣絹一丈五尺許，料物千五百疋〉，
　等身大日如来像一体，〈仏師賢円法印〉，
　金泥法華経一部，〈経師勝円〉，
　　已上各於仏経師住房奉始之，御衣木絹等自院差副行事主典代遣之，御経作物料，
北政所御正日料，〈十二月十四日〉，
　両界曼荼羅〈仏師等同前〉，
　等身阿弥陀仏一体〈仏師源尊〉，
　金泥法華経一部〈経師永義〉，
　　已上同前，（後略）」

38）仁安元年(1166)９月24日　平信範，藤原基実歿後の沙汰を珍順（経師ヵ）に仰せ了。〔『兵範記』〕
「始歿後沙汰，
　一幅半御仏六鋪，仰智順法印了，
　毎日供養料一尺阿弥陀仏五十体，〈二幅御衣絹八尺〉，仰頼源法橋了，法華経八部仰珍順了，毎七日料（後略）」

39）寿永２年(1183)６月７日　執筆僧珍賀・栄印，運慶願経を書写。〔法華経（運慶願経）巻第８奥書〕

「　　一校畢　二校畢
　寿永二年〈歳次癸卯〉六月五日〈戊戌〉辰時始之，同七日〈庚子〉酉時書畢
　　願主僧運慶＜并女大施主阿古丸〉執筆僧珍賀
　抑大願為体，書写経二部也，其内此経者，去安元年中之比発心，語色紙工，沐浴精進，令着浄衣，殊吹霊水，奉儲料紙畢，其後自然送年序，而間宿願開発，今年四月八日〈壬寅〉初打紙，爰女大代施主阿古丸，又発心相語色紙工，精進如前，儲料紙，同時打紙，同廿八日〈壬戌〉功畢，同廿九日〈癸亥〉請二人書手，同日同時点両筆書写間計，毎日行数，勧男女，行別三度礼拝勤之，同唱宝号并念仏，随分納三業其中，於書手二人〈珍賀，栄印〉者，沐浴闕日，殊致精誠，例時懺法无怠，所志行儀者半如法也，（後略）」

《制作環境》

40）大治４年(1129)７月７日　白河法皇崩御。年来御善根中に金泥一切経書写含まれる。〔『中右記』〕
「或人談云，本院年来御善根，
　絵像五千四百七十余体，
　生丈仏五体，〈丈六百廿七体〉
　半丈六六体
　等身三千百五十体
　三尺以下二千九百卅余体
　〔堂ヵ〕七宇，塔二十一基，小塔四十四万六千六百卅余基
　金泥一切経書写
此外秘法修善千万壇，不知其数，
此二三年殺生禁断諸国也，施大善根也」

41）天永４年(1113)５月３日　比丘尼法薬，紺紙金字法華経并開結，紺紙銀字阿弥陀・心経（和歌山・金剛峯寺所蔵）を書写し，翌年供養目録ほかとともに高野山に埋納。〔銅経筒蓋裏陽鋳銘〕
「天永四年癸巳／五月三日壬午／比丘尼法薬／奉書写之矣」
〔供養目録〕
「奉造立
（中略）
妙法蓮華経十三部〈三部書写／十部模経〉
千手経三十三巻〈模経〉　五十日講演〈逆修〉
書写五部大乗経〈五箇日供養〉　阿弥陀護摩三七箇日
妙法蓮華経一千部〈他人転読〉
修法華懺法百箇日〈天永二年六月六日結願件日図絵法華曼陁羅一鋪書写法華経一部自読千部法華経結願畢〉
（中略）
永久二年八月八日仏弟子比丘尼法薬」

42）永治２年(1142)３月17日　僧西念，紺紙金字経６部書写。ほかに多くの功徳を積む。〔白紙墨書供養目録〕
「敬白
奉安置供養前畢年来仏経惣目録
（中略）

一都合御経積三千六百八十八部内
　書写紺紙金字法花経六部具経共〈御供養先了〉
（中略）
永治二年三月十七日　沙弥西念敬白」

43）永久２年(1114)７月18日　熊野山の僧供料を院経師尋意弟子宅に聚め置く。〔『中右記』〕
「（前略）又申，熊野山申送云，先年僧供料，先奉催聚置京都人宅，而其後不進，付家主可被沙汰者，仍尋家主之処，院経師尋意弟子宅也，仰云，早召出可沙汰，（中略）又申，彼有貞従者強盗宅主，一日召集検非違使等，令勘問之処，院細工男反詞，誠以不便也，仰可誡宅主男事也，（後略）」
※ほかに「院仏師」「院薄師」「殿下薄師」「殿下細工」の呼称があがる。

44）寛弘４年(1007)８月　藤原道長，金峰山に登り，自書紺紙金字法華経８巻，開結経２巻，阿弥陀経，弥勒上下生経・成仏経３巻，般若心経あわせて15巻を埋経。
〔奈良県金峰神社蔵経筒陰刻銘〕
「南瞻部洲大日本国左大臣正二位藤原朝臣道長百日潔斎，率信心道俗若干人，以寛弘四年秋八月，上金峯山，以手自奉書写妙法蓮華経一部八巻，无量義経観普賢経各一巻，阿弥陀経一巻，弥勒上生下生成仏経各一巻，般若心経一巻，合十五巻，納之銅篋，埋于金峯，（中略）弟子道長敬白，
　　寛弘四年〈丁未〉八月十一日」

45）寛治２年(1088)７月27日　藤原師通，金剛蔵王にて自ら書写した金泥法華経・開結・心経・金剛寿命経を銅函に納め埋納す。
〔藤原師通願文（奈良県吉野郡天川村洞川出土）〕
「（前略）是以吉曜良辰一心合掌崛請数十口之比丘供養数百軸之経巻香花分飛宛然菩提之嵐梵唱高唱其奈荘厳園之月抑金泥妙法蓮華経八巻無量義経観普賢経般若心経金剛寿命経各一巻慇懃致匪石之誠手自成垂露之点納之金銅函埋金嶺（中略）
　寛治二年七月廿七日弟子内大臣正二位兼行右近衛大将藤原朝臣師通敬白」

46）1184以前　前大僧正覚忠，御嶽より大峰にまかり入りて，神仙にて金泥法華経を書写し埋能する。
〔『千載和歌集』巻第17雑歌中〕
「前大僧正覚忠御嶽より大峰にまかり入りて，神仙といふと頃にて，金泥法華経書きたてまつりて埋み侍るとて五十日許とどまりて侍けるに，房覚が熊野の方よりまかり入りけるに付けていひをくりて侍ける
　　前大納言成通
おしからぬ命ぞさらに惜しまるる君が都にかへりくるまで
　　前大僧正覚忠
憂き世をば捨てて入りにし山なれど君が問ふにや出でむとすらん」

47）久寿２年(1155)９月16日　藤原忠通夫人・宗子，入棺に際し金泥法華経を納入。「先例非ずといえども御遺令なり。」〔『兵範記』〕
「法性寺殿有御入棺事，（中略）安御所辺，次奉入之，（中略）金泥法華経一部〈雖非先例，御遺令云々，新儀定歟〉（後略）」

48）五種法師の今様〔『梁塵秘抄』巻第２〕

「法華経廿八品歌　百十五首（中略）法師功徳品　三首（中略）
妙法蓮華経，書き読み持てる人は皆，五種法師と名づけつつ，終には六根清しとか」

49）長寛２年(1164) ９月　平清盛ら，厳島神社に平家納経奉納。「尽善尽美。」
「弟子清盛敬白（中略）弟子将作大匠　能州若州両州刺吏門人家僕都卅二人　各分一品一巻　所令尽善尽美也　花敷蓮現文　出自吾家之合力　玉軸綵牋之典　成自一族之同情　蓋為広修功徳各得利益也（中略）長寛二年九月日弟子従二位行権中納言典皇后大宮権大夫平朝臣　清盛敬白」

50）承安２年(1172) ４月17日　平清盛・頼盛，嘉応２年９月５日よりこの日まで金字法華経并結経を書写。〔紺紙金字法華経并観普賢経（厳島神社所蔵）奥書〕〕
（巻第七奥書）
「承安二年正月十五日書写了，
参議正三位行右兵衛督尾張権守平朝臣頼盛，
端六行者入道太相国御筆也，」
（巻第八奥書）
「承安二年三月廿三日書写了，
参議正三位行右兵衛督尾張権守平朝臣頼盛，
端廿五行入道太相国御書写也，」

51）建久２年(1191）閏12月５日　藤原兼実，故女院のための一品経に結縁し，勧発品を書写。紺紙金泥，前院手書を破り料紙とす。紺紙金泥。「表紙同色，其絵常の如し。」〔『玉葉』〕
「此日，奉為故女院奉供養一品経，（中略）余分勧発品有所思自書之，破前院手書漉料紙，其色之濃縹色，（中略）以金泥書之，表紙同色，其絵如常，金泥経，水精軸，廿八品，開結経，心経，阿弥陀経」

52）保元２年(1157)11月16日　高陽院の御忌日にあたり，白河御堂にて法事を行う。銀１尺阿弥陀仏１体（往日御物を鋳す），金泥五部大乗経を供養「殊に美麗。」〔『兵範記』〕
［高陽院御忌日也，（中略）金泥五部大乗経，〈立后当初以後，被書儲之，殊美麗，毎事珍重御経也〉，（後略）」

53）唐・開成５年(840) ５月17日　円仁，五台山華厳寺において，金字法華・小字法華をみる。精妙の極なり。〔『入唐求法巡礼行記』〕
「実に五台山大華厳寺は是天台の流というべし。（中略）金字法花，小字法花は精妙の極なり。」

54）宋・景徳１年(1004)　寂照，真宗に無量寿仏像・金字法華経・水晶念珠などを献ず。源信弟子紹良ら，知礼へ金字法華経を送る。〔『釈門正統』第２〕
「知礼伝，日本国師源信，嘗遣学徒寂昭，持二十七問，詢求法要，師答之咸臻其妙，厥後広智嗣席，復遣其徒紹良等二人，齎金字法華経，如贄見之礼，因哀泣致敬，請学於輪下，三載其道大成，還国大弘台学，会魯公碑其塔，具道之，」

55）延久５年10月(1073)　成尋，神宋皇帝より金泥法華経，版本一切経，錦20段を賜り帰朝。〔『百錬抄』〕
「十月。入唐僧成尋帰朝。大宋皇帝被献金泥法華経。一切経。錦二十段。」